第24回リハ工学カンファレンスを開催して

第24回リハ工学カンファレンス事務局　研究所福祉機器開発部　　相川孝訓

第24回リハ工学カンファレンスは、平成21年８月26日（水）～28日（金）に「飛翔－いま考える、当事者発のリハビリテーション工学」をテーマとして開催されました。リハ工学カンファレンスは日本リハビリテーション工学協会の主要な事業の１つで、年１回程度の頻度で、日本各地で研究発表および情報交換大会を開催しており、通常は８月末に開催されます。参加者は、当事者は勿論のこと、エンジニア、リハビリテーションの現場や障害者教育の現場で働くスタッフなど多くの職種の方々が集まります。カンファレンスは通常の学会とは異なり、学術発表よりも当事者に役立つような話題が歓迎され、気軽な服装での参加が推奨されています。所沢では第８回リハ工学カンファレンスの開催から16年ぶりの開催になりました。大会長に諏訪基研究所長、実行委員長に井上剛伸福祉機器開発部長、福祉機器開発部を中心にして研究所、学院や会計課の方々を始めセンター内外の方々にご協力頂き、開催にこぎつけることが出来ました。ボランティアとして、内部では学院の学生さん、外部では東洋大学と早稲田大学の学生さんにご協力を頂きました。

２年前から準備を始めましたが、実際に動き出したのは１年前でした。準備不足のため、小さなトラブルがいろいろとありました。まだ、決算が確定していませんが、おかげさまで、赤字にはならない様です。参加者ですが、16年前に国リハで開催した前回の第８回リハ工学カンファレンスでは600人弱の参加者があったため、今回はこの９割程度の参加人数を予想していました。しかしながら、予想は大幅に外れ、391人の参加者でした。ただ、今回は当事者の講演者が多くなるような企画を数多く立てたために、講演者やスタッフ、ボランティア等を含めれば合計して647人になるため、そんなに大幅な減少ではないと思われます。今回のカンファレンスは、多くの障害当事者の方々に発表をお願いしました。運営側としては情報保障や当事者対応についての考慮が必要になり、どこまで対応出来るか不安でしたが、要約筆記や手話通訳、論文集の電子テキスト版作成などは何とか対応することが出来ました。

基調講演は厚生労働省福祉工学専門官の小野栄一氏に「厚生労働省　福祉工学専門官のまわりに吹く新たな風」と言うタイトルで講演して頂きました。

パネルディスカッションは「いま考える、当事者発のリハビリテーション工学」という今回のカンファレンスのメインテーマで当事者の方々をパネリストとしたディスカッションを行いました。この内容の一部はNHKの夕方のニュースでも紹介されました。また、障害当事者セッションを設けて障害当事者の方々から17演題もの話題を提供して頂きました。さらに特別企画セッションとして発達障害者に役立つ支援技術について考えるセッションや関連企画として発達障害のある子どものコーヒー販売体験活動を行いました。このコーヒー販売体験活動はNHK首都圏ネットワークで特集として放送されました。また、全国頸髄損傷者「実態調査」報告会やリハビリテーション工学基礎講座などもありました。リハビリテーション工学基礎講座は今回初めて企画されたもので、リハビリテーション工学とは何かについて１日で概要を理解して頂くよう構成されたものです。予想以上の方が参加されていました。

もちろん一般講演も89演題が登録され、活発な発表が行われました。実物展示、実演を含む展示としてのインタラクティブセッションも15演題あり、盛況に実施されました。また、国際セッションも18演題あり、海外からも14人とやや少ないですが、参加者がありました。その他、福祉機器コンテストへの応募作品の展示や、ランチョンセミナーなども開催されました。

通常業務の平日での３日間の開催で、学院を始めとするセンター

各部門の方々にはいろいろとご迷惑をお掛けしたこともあるかと思いますが、ご容赦頂ければ幸いです。

次回は、平成22年８月26日（木）～28日（土）に仙台で開催されます。カンファレンスに興味を持たれた方がいらっしゃいましたら、是非とも参加して下さい。なお、16年前に所沢で開催された第８回リハ工学カンファレンスの翌年の第９回リハ工学カンファレンスも仙台で開催されており、なにか因縁のようなものを感じます。

所沢での開催と言うことで、所沢市からも市内の観光案内や手打ちうどん焼だんごマップなどの紹介パンフレットを４種類も提供して頂きました。パンフレットがあるかどうか不安でしたが、頂いてみて所沢の案内がこんなにあるとは全く思いませんでしたし、内容を見て所沢を再認識しました。また所沢航空発祥記念館にもご協力をお願いし、リーフレットとパンフレットの提供を頂きました。

最後に、ご協力頂いた多くの方々に、もう一度、お礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

高等教育機関における障害学生支援に関する研究

研究所障害福祉研究部　北村弥生

修学支援ネットワークの協力機関に国リハが登録されました

平成20年度WHO指定研究協力センターセミナー「高等教育における障害学生に対する生活・学習支援」の開催を機に、独立行政法人日本学生支援機構の修学支援ネットワークに国リハが協力機関として登録され、年３回の運営委員会と運営委員会MLに参加し情報交換を始めました。

「障害学生の支援の充実」は、平成19年12月に決定された重点施策実施５か年計画にも記載されている課題で、日本育英会から発展した日本学生支援機構が「全国の大学や関係機関がネットワークを作り、障害学生就学支援制度の整備を目指すなどの事業を推進すること」などにより、「障害のある学生が学びやすい環境を作る」ことが謳われています。

「修学支援ネットワーク」には、全国の大学のうち障害学生支援に経験の豊富な９大学が拠点校として、関連機関として３機関（筑波技術大学、独立行政法人特別支援教育総合研究所と国立障害者リハビリテーションセンター）が登録されています。全国の大学の支援担当者が障害学生についての知見を拠点校に求め情報や支援を得る仕組みです。また、日本学生支援機構は、毎年、障害学生に関する統計調査を行い平成20年度調査では全国の大学・短大・専門学校生のうち0.2%に障害があることを示すほか、各種の障害学生に関するマニュアル作成や研究を支援しています（http://www.jasso.go.jp/tokubetu_shien/index.html）。

どんな支援が有効なのか？

米国では、リハビリテーション法とADAで障害者が高等教育を受ける権利を明文化されてから大学に障害学生支援部門が増え、障害学生コーディネイターが学生と教員の間で合理的な配慮を調整しています。障害学生支援コーディネイターの業務は、履修手続きの支援、試験環境や学習環境の調整（物理的環境整備、手話通訳やノートテイカーの派遣など）、寮生活を含めた学生生活での困難に対する相談、州政府から得られるサービスの紹介など多岐にわたりますが、電子図書と情報技術の活用には特に熱心です。視覚障害と発達障害の場合は、学生が持参した教科書を障害学生支援部門で解体し、自動紙送り装置つきの高速スキャナと読み取りソフトで電子図書（テキストファイルやMS-Wordのファイル）に変換して学生に提供します。また、パソコンや携帯端末（iPhoneなど）で電子図書を読み上げたり、学習支援ソフトを活用するための技術講習を行います。上肢障害の学生にもページめくりをしなくてすむ電子図書は有効であるため、州政府から専用再生機の給付を受けることもできます。

研究として何を行うか

日本でも著作権法37条の改正により、平成22年１月１日から「視覚障害者その他視覚による表現の認識に障害のある者」と「聴覚障害者とその他聴覚による表現の認識に障害のある物」は「当該視覚（聴覚）著作物について」「複製し、又は自動公衆送信を行うことができる」ことになるため、障害者を対象にした電子図書の作成が行いやすくなります。研究としては、１）どのような障害の人が著作物をどのように電子化することにより、どのような効果があるか明らかにすること、２）障害学生が「合理的配慮」を得る交渉を教員と行う知識と技術を習得する短期研修の開発、３）障害学生の就労移行支援研修の開発などを行っていく予定です。ご関心をお持ちの方は、是非、ご連絡ください。また、関連部門への研究協力のお願いをさせていただくこともあると思いますので、よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、修学支援ネットワーク登録にご尽力くださいました皆様に御礼申し上げます。

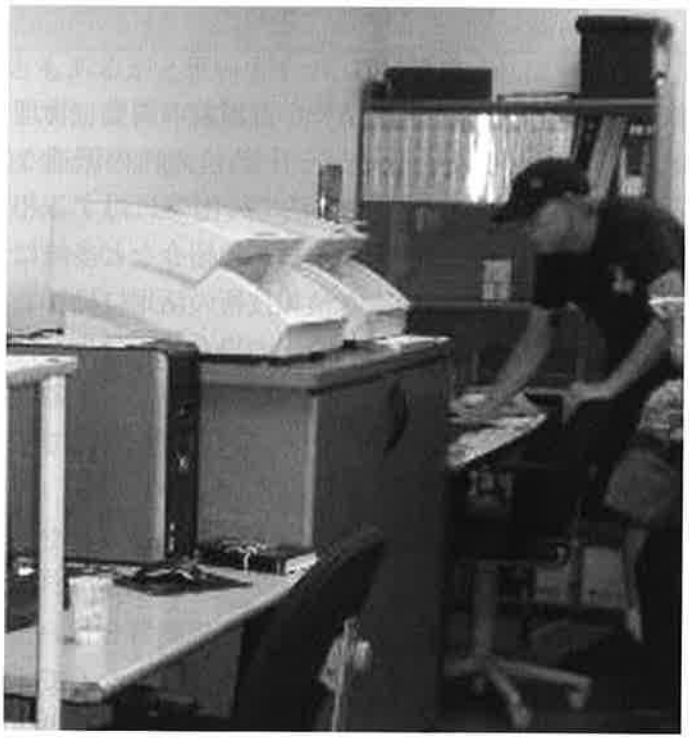

図１：大学障害学生部門の設備。写真の中央にある白い２台の高速スキャナは電子図書の作製に活用されている。

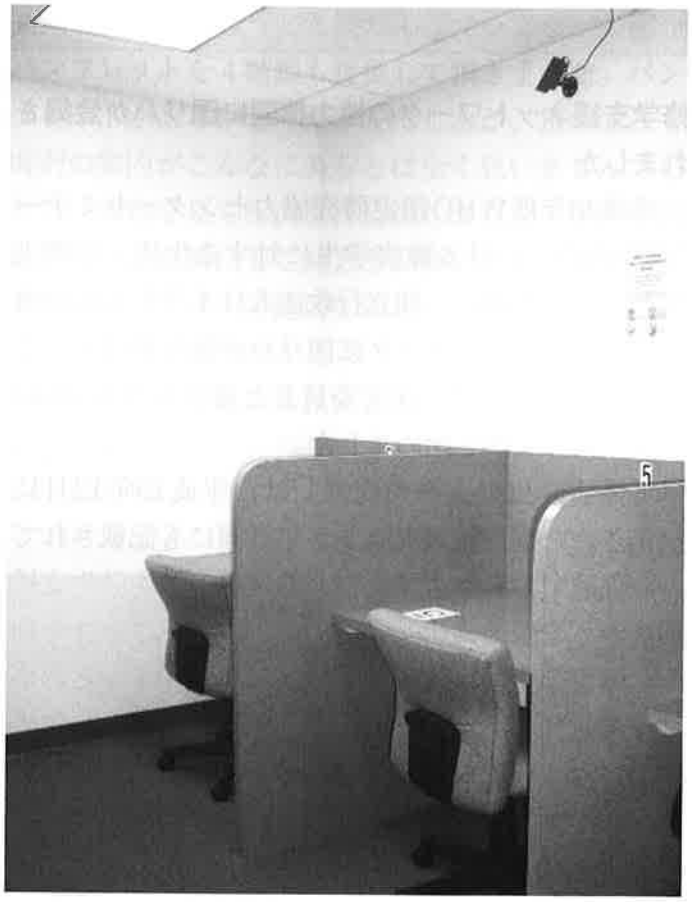

図２：モンタナ大学障害学生部門にある試験用の部屋。

図３：日本学生支援機構　修学支援ネットワーク　ホームページ

平成21年度リハビリテーション心理職研修会（応用）を終えて

（研修担当）総合相談支援部　総合相談課　心理判定専門職　川辺明子

平成21年度リハビリテーション心理職研修会（応用）が、９月９日（水）～11日（金）の３日間に渡り、当センター学院にて開催されました。

本研修会は、毎年５月頃に開催の「基礎」編、９月頃に開催の「応用」編によって構成されており、今回はその「応用」編についてのご報告をさせていただきます。

毎回、たくさんの応募をいただいておりますが、今回も定員20名に対し、北は岩手県から南は沖縄県まで計35名の方々の参加をいただきました。それぞれの方が日々の業務でお忙しい中、遠方にもかかわらず参加していただけることを嬉しく思います。

今回のテーマとしては、「高次脳機能障害」に加え、「発達障害」にも焦点をあてて、各方面でご活躍されております先生方にご講義をいただきました。（今回のプログラムにつきましては別表の通りです。）研修会終了後に、参加者の方からいただいたアンケートでは、「あらためて復習をする機会となった」「具体的な事例や提示が、日頃の現場での仕事内容とつながった」「職場で研修内容を共有したい」等、今回も講義内容につきまして概ねご好評を得ることができました。また、今後の講義内容の希望も多くいただき、貴重なご意見となりました。

なお、第１日、２日目のお昼には、ランチミーティングを行い、参加者の方からそれぞれ自己紹介をいただきました。職種も様々であり、心理職以外に、PT,OT,ST等の方々も多く参加されていました。チームで支援にあたるためには、各職種の仕事を理解していることは前提として重要なことであり、こうした場を他職種の方にもご提供できることは当研修会のメリットの一つでもあると思いました。また、経験年数や活動地域も多岐にわたり、様々なバックグラウンドを持つ方々に参加いただいていることをあらためて感じました。そうした様々な方々が交流し意見交換できる機会を提供できることは、この研修会の一つの役割かと思います。

すべての参加者の方のニーズを同時に満たすことは難しいかもしれませんが、今後も、当センターで開催できるメリットは何かを考えながら、少しでも多くの方に「場」を提供できるよう努めてまいりたいと思います。

平成21年度　リハビリテーション心理職研修会（応用）

月　日	午　　前	午　　後
9月 9日 (水)	受付　(9：00～9：40) 開講式・オリエンテーション (9：40～10：00) ①　画像と神経心理学　(10：00～11：30) 国立障害者リハビリテーションセンター病院 医療相談開発部長　深津　玲子 ○　ランチミーティング（自由参加）	②　心理的アプローチ －身体障害・高次脳機能障害・発達障害－ (13：30～16：30) 岐阜医療科学大学保健科学部 看護学科　教　授　阿部　順子 (臨床心理士)
10日 (木)	③　発達障害者児の地域支援と機関連携 －支援・相談事例からの考察－ (9：30～12：00) 埼玉県発達障害者支援センター　まほろば センター長　藤平　俊幸 ○　ランチミーティング（自由参加）	④　神経心理学的評価と認知的アプローチ (13：30～16：30) 帝京平成大学健康メディカル学部 臨床心理学科　教　授　中島　恵子
11日 (金)	⑤　高次脳機能障害のリハビリテーション (9：30～11：30) 国立障害者リハビリテーションセンター病院 精神科医長　浦上　裕子	⑥　WAIS-Ⅲの実施法と解釈 (12：30～15：00) 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 講　師　山中　克夫 閉講式　(15：00～15：30)